

<実践報告>

ポートフォリオ評価を取り入れた英語科における音読学習

橋本直子 愛知県知多郡東浦町立北部中学校

東原義訓 信州大学教育学部附属教育実践総合センター

The Portfolio Assessment in English Reading Activity at a Junior High School

HASHIMOTO Naoko: Hokubu Junior High School, Higashiura, Aichi

HIGASHIBARA Yoshinori: Center for Educational Research And Training,
Faculty of Education, Shinshu University

This is a report on digital portfolio assessment activity in English reading and reciting practice at a junior high school in Aichi prefecture. In English learning, it is considered to be one of the most important purpose to improve foundation of oral communicative abilities. In order to improve their abilities, digital portfolio assessment using video were effective because it enables the students reflect on their own performances.

Using computer network system called Studynote, the students exchanged their pages with self-estimation on their video reflections which were recorded their reading or reciting performances and gave advices each other. Through this sequence of study, the students were able to reflect their learning process and learned to improve their reading or reciting abilities. Furthermore, they were able to increase the quality of study.

【キーワード】 英語教育 音読学習 スタディノート ビデオ映像
デジタルポートフォリオ評価

1. はじめに

新しい学習指導要領の完全実施に向けて、教育課程審議会からは評価に関する答申が随時打ち出されてきた。平成10年7月には、「学習の過程を重視し、児童生徒の良い点や進歩の状況などを積極的に評価」することや、「児童生徒が自らの学習過程を振り返り、新たな目標や課題を持って学習を進めていけるような評価」の導入が、12年12月には、評定の絶対評価の導入が打ち出された。13年4月には指導要録の改善等についての通知により、指導要録に示す評価・評定の方法の転換が示され、各学校における評価規準の作成や評価方法の工夫への取り組みが本格化した。そして平成14年度から新しい学習指導要領が完全実施されている。

中学校学習指導要領の英語の目標は、「積極的にコミュニケーションを図ろうとす

る態度の育成」や「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」こととされている。この目標に対する到達度を評価するにあたり、授業内における生徒の学習活動を「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の領域に渡り、4つの観点、すなわち、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「表現の能力」「理解の能力」そして「言語や文化についての知識・理解」において、これまで以上にきめ細やかに評価することが求められることになる。しかし、「聞くこと」や「話すこと」を重視した目標設定となっているにもかかわらず、音声や動作を伴う表現活動においては、これまで十分な評価方法がなされていたとはいえない。この反省に基づき、学習者が自らの表現活動の学習過程を振り返り、新たな目標や課題を持って学習を進めていけるような評価方法を工夫して取り入れていくことが重要な課題であると考えた。この課題解決のためにデジタルポートフォリオ評価活動を取り入れることにした。

小学校の国語科において、デジタル映像を取り入れた朗読の学習で、コンピュータ・ネットワークを活用したデジタルポートフォリオ評価活動が効果的であることが実践により明らかにされた(吉田 2001)。中学校の英語科においても、音読学習にこの手法を取り入れ、自己評価と相互評価を通して振り返りの活動を行う、デジタルポートフォリオ評価活動を実践しその効果を確認した。本稿はその実践と効果について論じるものである。

2. 方法

2.1 デジタルポートフォリオ評価

メイヤーらの定義によると、ポートフォリオは、「生徒の作品を目的を持って収集したものであり、ひとつあるいは複数の領域における努力や進歩、達成をいろいろな人に見てもらうものであり、この収集物には、生徒が参加して選んだ作品、選択の基準、よさを判断する基準、振り返り活動を行ったことの証拠などが含まなければならない」と余田(2001)は述べている。本実践では、生徒の作品として音読や暗唱のビデオ映像を提示し、読むこと、話すことに関する8項目の評価基準を設け、同学年の生徒と英語教師がそれぞれの作品を見て評価した。これらの活動は、ネットワークで結ばれたコンピュータ上でやり取りされ、デジタルの環境で行われるので、デジタルポートフォリオといわれる。

2.2 スタディノート

(1) 利用の背景

英語学習において、コミュニケーション活動や音読、暗唱活動による音声や映像などの消えていく対象を、記録し再生して評価に活用することは正確な評価活動に極めて効果的であるが、従来の日常の評価の中では十分に実施されていたわけではない。一般的な従来のビデオカメラやテープレコーダーなどでは、部分的な再生がしにくく、限られた授業時間内での使用は不便だからである。しかし、最近の技術革新により、

映像や音声を比較的容易にコンピュータ画面に貼り付けたりすることができるデジタルの環境が整い、授業にも生徒や教師が日常的に活用することが可能となった。

(2) スタディノートが提供できる学習環境

本実践では、校内ネットワークに接続された複数のコンピュータ上で稼動するスタディノートというソフトウェアを使用した。デジタルポートフォリオ評価を行うためには、生徒の作品、つまり音読の様子のデジタル映像とともに自己評価したページをネットワーク上で公開し、さらに生徒同士の相互評価のやり取りを行うことが必要である。その一連の活動を可能とするシステムがスタディノートだからである。スタディノートは、操作が容易に覚えられるため、操作説明に多くの時間をかけることなく、効率よく学習を進めることができるソフトウェアである。

スタディノートには主に4つの機能が備わっている。「ノート」「電子メール」「掲示板」「データベース」と呼ばれる4つの機能を効果的に活用することによってさまざまな学習活動が可能となる。本実践では、生徒の音読のデジタル映像と自己評価のページを「ノート」で作成し、「親情報」として「データベース」に登録した。「データベース」に登録した作品は、ネットワーク上のどのコンピュータからも見ることができ、それぞれの作品に対して感想や意見を「子情報」で送ることができる。つまり教師と生徒との情報交換だけでなく、ネットワーク上のすべての生徒同士の情報のやり取りが可能となるのである。スタディノートの「ノート」と「データベース」の2つの機能を活用することにより、自己評価と相互評価を繰り返し行い、振り返りを行うデジタルポートフォリオ評価の活動が可能となる。

2.3 実践の計画

(1) 生徒の実態

本校の第1学年の生徒は、4月から1年間を通して教科書本文の暗唱活動を行ってきた。本文の学習が終了次第、生徒は暗唱チェックカードを持って、教師に暗唱を聞いてもらい、サインをもらうという学習活動である。何度も繰り返し読んだり覚えたりする学習を通して、自然に英語が使えるようになることを目的とした。しかし、この教師と生徒の一对一の暗唱チェック活動では、生徒が自分の英語の発表を聞いて、自己の学習の状況を客観的に判断するという自己評価や振り返りの学習ができなかったし、自分の暗唱について教師以外の他者からの評価や助言を受けることができなかった。また、覚えることを得意とする生徒は、速いペースで暗唱を進め、教師とのコミュニケーションも頻繁になり、助言も多く受けることができるが、なかなか英文を覚えられない生徒にとっては、その機会が少なかったという点で、全ての生徒の英語の表現力を高める活動にまでは至らなかった。

そこで、生徒一人一人が自分自身の振り返りを行い、「話すこと」や「読むこと」の表現力を高めるための音読の学習活動が必要であると考え、読み物教材を題材にポートフォリオ評価を取り入れた音読学習活動を実践することにした。

(2) 単元の目標の設定

本実践の単元全体は「月世界より」という読み物教材を題材に、以下の3点を目標として設定した。①一文一文の意味にこだわらず通読し、全体の概要を把握しようとする。②指示語がさす内容を把握し、概要を理解した上で本文を暗唱することができる。③月から見た地球は国境がわからないことから、地球人として世界各国の人々と「共生」していることに気づく、の3つである。教材の内容理解の学習後に「かけがえのない地球の大切さに思いをよせて、気持ちをこめて音読することができる」という音読活動のための学習目標を設定し、ポートフォリオ評価活動を3時間で実践した。

(3) 学習の展開と活動の流れ

音読活動の学習の展開と活動の流れは図1の通りである。大枠はコンピュータ室での学習である。小枠の右に生徒の学習活動の流れを具体的に示した。学習活動にかかる時間には個人差があり、学習の進捗にはある程度の差が生じるので、記載した時間は平均的な所要時間である。学習の最後の段階にのみ「まとめとしての振り返り」を明記してあるが、各段階においては個人内で振り返りの学習がなされなければならない。

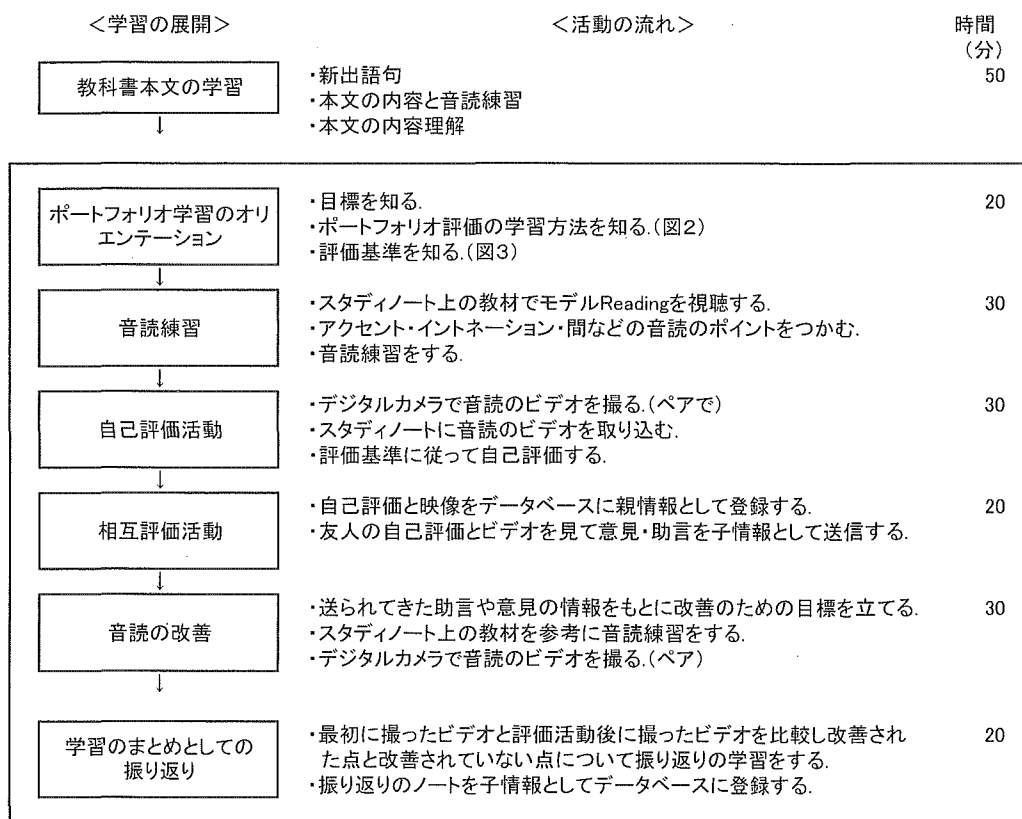


図1 学習の展開と活動の流れ

(4) 評価基準

生徒が自己評価活動や相互評価活動を正確に行うことができるようにするためには実践前に評価基準を明らかにしなければならない。本音読活動では以下の8つの項目を評価基準として授業者が設定した。

- ① よく聞こえるように大きな声で発音している。
- ② 英語らしい発音に気をつけて音読している。
- ③ 語句や文のアクセント（強弱）に気をつけて音読している。
- ④ イントネーション（音調）に気をつけて音読している。
- ⑤ 速さに気をつけながら音読している。
- ⑥ 間の取り方に気をつけながら音読している。
- ⑦ 英語らしいリズムに気をつけながら音読している。
- ⑧ 表情豊かに気持ちをこめて音読している。

学習者がこれらの8つの評価基準を常に意識しながら音読をすることにより、読むことの表現力を高めていくことができると考えた。これらを5段階で自己評価することにした。

(5) スタディノート上での教材の作成

コンピュータやデジタルカメラを使ったポートフォリオ評価の音読学習が、生徒の必要に応じて効率よく行うことができるように、教師の事前の準備としてスタディノート上に2つの教材を作成した。「音読の学習の方法」と「自己評価の書き方」という教材である。

「音読の学習の方法」の使用目的は、最初のオリエンテーションの時間に生徒が一連の学習の流れを理解できるようにすることと、音読練習時にモデル・リーディングが聞きたいときや、評価基準を確かめたいときなど、いつでも再生して聞いたり、内容を確かめたりすることができるようにすることである。

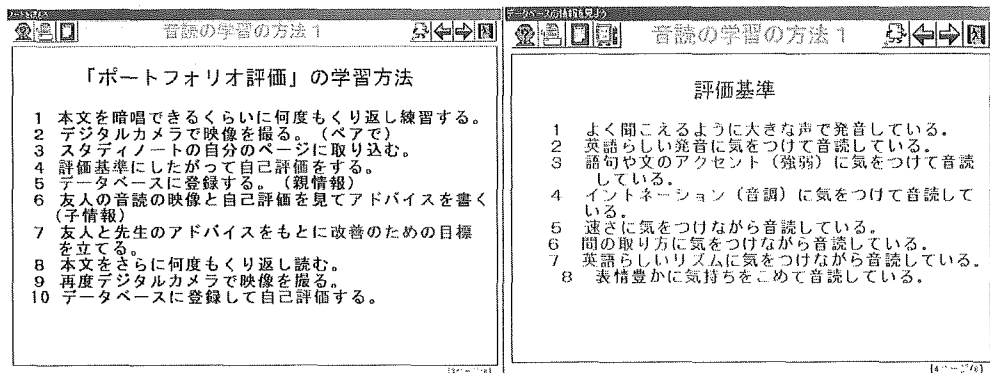


図2 教材「学習の方法」のページ

図3 教材「評価基準」のページ

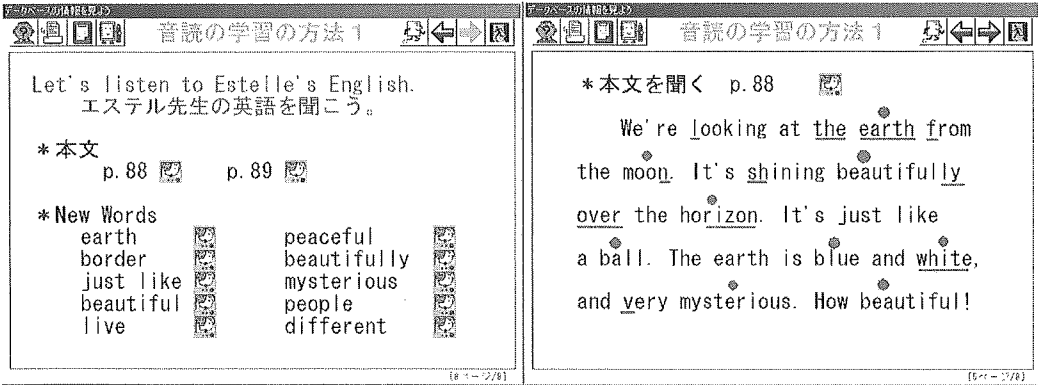


図4 教材 ALTのビデオ再生ができる 図5 教材 本文の学習ができる

その構成と内容は、①目標、②ポートフォリオ評価の学習の方法、③評価基準、④本文の活字とアクセントやイントネーションなどの表示を見ながらCDのモデル・リーディングの音声が開けるページ、⑤ALTが本文を暗唱している映像や新出語句などをクリック再生で聴くことのできるページである。もうひとつの教材「自己評価の書き方」は、具体的な自己評価の書き方の例を示したものである。8つの評価基準に照らし合わせ、音読や暗唱のビデオを見ながら、5段階で自己評価しそれについてのコメントを記したものである。

(6) 生徒の準備

生徒にとってはスタディノートの操作経験は特に必要としないが、ウィンドウズの基本操作、デジタルカメラの操作には事前に慣れていた方が学習を効率よく進めることができる。

3. 実践事例

3.1 「ポートフォリオの学習の方法」のオリエンテーション

コンピュータールームでの第1時間目の授業では、初めて取り組むポートフォリオ評価の音読学習の方法について理解することが第一の目標である。まず、音読学習の目標が「かけがえのない地球の大切さに思いをよせて、気持ちをこめて音読することができる」ということを確認し、次に、スタディノートのデータベース上に事前に作成してあった教材「音読学習の方法」に従って説明をした。生徒たちは、コンピューターの画面を見ながら、新しいことに取り組もうとする意欲を持って真剣に集中して聞いていた。

3.2 音読練習

スタディノート上の教材にあるモデル・リーディングのビデオ再生ボタンをクリックすると、コンピュータールーム中に一斉に英語が流れ始めた。生徒は聞きたいページや聞きたい箇所、語句を繰り返し何度もクリックして、楽しみながら正しい発音やアクセント、イントネーションを聞いて確認していた。モデル・リーディングは、教科書のCDの音声をビデオ録画したもので、普段使用しているCDラジカセの映像とネ

イティブ・スピーカーの朗読である。ALTの先生が実勢に暗唱，発音しているページは生徒にとって大変に新鮮で興味深いものだったようだ。生徒が自分の聞きたい箇所を必要に応じて何度も再生することができるという環境を提供したことは，主体的な学びの意欲につながったと思われる。

3.3 自己評価活動

音読練習終了後，生徒はデジタルカメラで音読または暗唱をペアで互いにビデオ録画し合った。デジタルカメラの1枚のフロッピーに1分のビデオ録画ができるように設定し，2ページの本文の音読が1枚のフロッピーに収まるようにした。自分なりに満足のいく音読になるまで，数回の取り直しをしている生徒もいた（図6）。録画をしたデータは，スタディノートにビデオボタンで取り込んだ。そして取り込んだビデオを視聴しながら各自で自己評価を行った。評価は，8つの評価基準に従い5段階で行った（図8，9）。



図6 デジカメで音読を録画する生徒



図7 相互評価活動をしている生徒

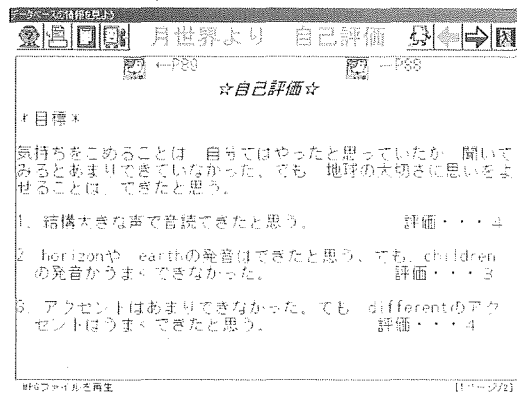


図8 生徒Aの自己評価のページ1

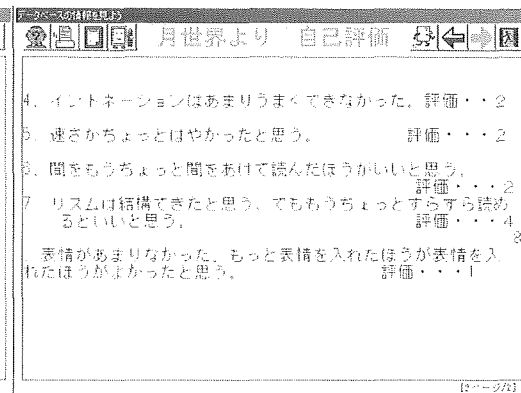


図9 生徒Aの自己評価のページ2

3.4 相互評価活動

自己評価の記述が終了した生徒は，自分の作成したページを，「データベース」に親情報として登録する。これによって，どの生徒からも先生からも互いのページを見ることができるようになる。自分のページを登録した生徒は，随時新しく登録されてく

る友人のページを閲覧して、それぞれのビデオを視聴しながら意見、感想、助言を書き込んでいく（図7）。このときに留意させたことは、相手の良い点、優れた点に注目することだけでなく、できるだけ相手に参考になるような助言や意見を書き込むということである。そうすることにより、生徒が自らの学習過程を振り返り、新たな目標や課題を持って学習を進めていくための手助けになると考えたからである。これらの意見や感想、助言は、相手の親情報に対して子情報としてデータベースに送信する。

3.5 音読の改善

送られてきた友人や教師からの助言や感想、意見をもとに、改善のため目標を立て、再度音読の改善に取り組む。この際、生徒はスタディノート上の教材を用いて、発音やアクセント、イントネーションなどを確認し、自分の英語をより良いものにしていく。そして最終的に音読または暗唱したものをビデオ録画する。

3.6 学習のまとめとしての振り返り

最初に撮ったビデオと評価活動後に撮ったビデオを並べて比較し、改善された点と改善されなかった点について振り返って、図11,12のようにスタディノートに書きこみ、子情報として再度データベースに登録した。登録したものは、教師や生徒が相互に情報を交換し合い、互いの学びを共有した。

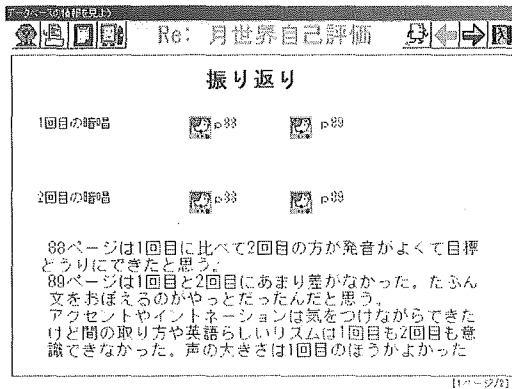


図10 生徒Bの振り返り

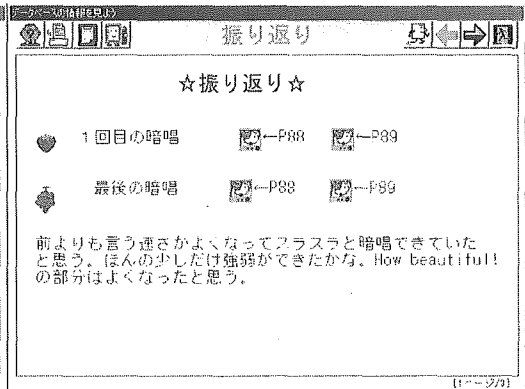


図11 生徒Cの振り返り

4. 結果

一連の音読学習を通して、データベースに登録された生徒ひとりひとりのポートフォリオを分析すると、その学びの内容を以下のようにまとめることができる。紙面の都合上、①から④についてのみ具体例を図で示す。

- ① 友人と教師の助言をしっかりと受けとめ、発音と気持ちをこめて暗唱することに改善がみられた（図12, 図13）。
- ② 3回目の暗唱のビデオ撮影をしてやっと自己の暗唱に納得した（図13）。
- ③ リズムやテンポ、発音に気をつけて練習し、目標が達成できたという充実感を味わうことができた（図14）。
- ④ 映像により無表情で気持ちがこめられていなかったことに気づき、自らの努力

で改善できるということを実感した(図15)。

- ⑤ 「かけがえのない地球の大切さに思いをよせて、気持ちをこめて音読する」という目標に迫る自己評価と課題設定をすることができた。
- ⑥ 自分の達成できた点と今後の改善点とを含め、きちんと振り返りの活動ができ、次への活動につなげることができた。
- ⑦ 活動を通して音読のレベルから暗唱のレベルまで高められた。
- ⑧ 相手の優れた学習状況に刺激されて自分も頑張れたと自覚した。
- ⑨ 自分が意識したことと実際の録画との違いやずれに気づき、もっと努力する必要があることを認識した。

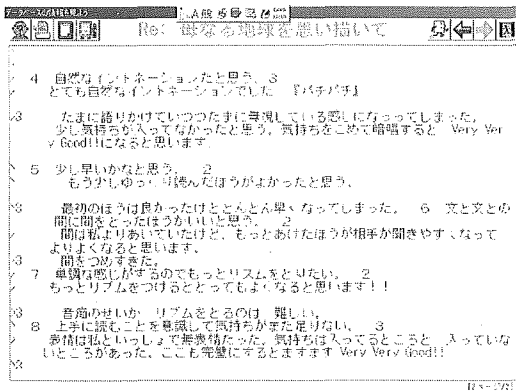


図 12 生徒Dへの感想と助言

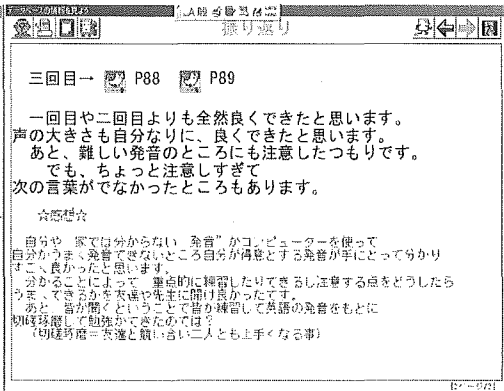


図 13 生徒Dの振り返り

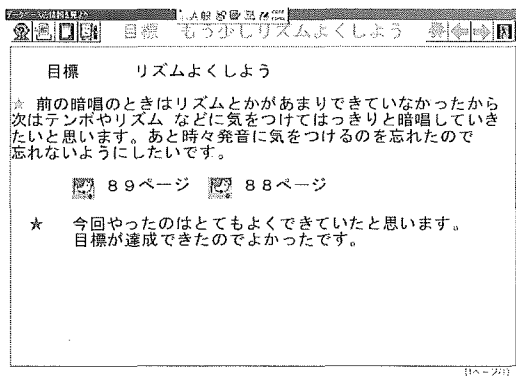


図 14 生徒Fの目標と振り返り

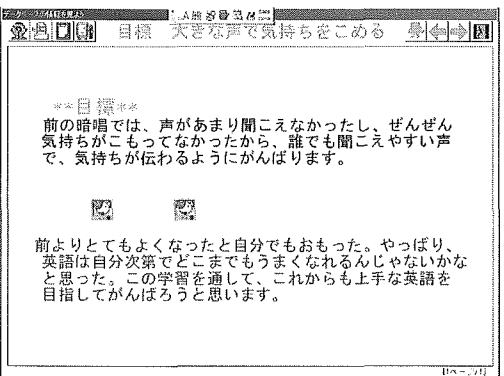


図 15 生徒Gの目標と振り返り

以上、9つの例をあげたが、どの生徒も自分の音読・暗唱しているデジタル映像を何度も再生し、じっくりとみることによって、自己評価と相互評価、振り返りがしつかりとなされていたといえる。

これは音読学習を行ったあとの、ある生徒の率直な感想である。

自分や家ではわからない発音が、コンピュータを使って自分がうまく発音できないところ、自分が得意とする発音が手にとって分かり、すごく良かったと思います。分

かることによって、重点的に練習したりできるし、注意する点をどうしたらうまくできるかを友達や先生に聞いて良かったです。あと、皆が聞くということで皆が練習して英語の発音をもとに切磋琢磨して勉強ができたのでは？（切磋琢磨＝友達と競い合い二人とも上手くなる事）

この内容から、授業者がこの学びでめざすものを生徒が学びながら感じ取り、体得していたということがわかる。授業者としては嬉しい限りである。

5. 考察

スタディノートというネットワーク・システムを活用して行った、英語の音読活動におけるデジタルポートフォリオ評価活動は、次の点において効果が認められたといえよう。

- ① 読むこと、話すことに関して8つの評価基準を設け、何に意識して練習したり評価したりしたらよいかを明らかにしたことで、学習の質を高めることができる。
- ② ネットワークを活用し、スタディノートのデータベース上で自己評価や相互評価の情報交換をすることにより、多数の友人や教師に努力の様子や優れた点をみてもらうことができる。また、異なる学級の友人など、普段みられない相手の学習の過程や成果を見ることができると同時に、優れた点に刺激されて相互啓発することができる。
- ③ 映像を公開するという一方で、いい加減に済まされないという意識が高まり、より高い目標を設定して課題解決のための努力をすることができる。また、相互に助言を真摯に受けとめ、暗唱を改善することができる。
- ④ 映像により自分の意識と実際とのずれがあることに気づき、改善のための努力をすることができる。
- ⑤ 映像の比較により自分の達成できたところと今後の改善点とを含めてきちんと振り返りの活動ができるので、目標が達成できたという充実感を味わうことができ、次への活動につなげることができる。

6. 結論

英語の音読学習において、自己評価活動と相互評価活動にじっくりと取り組んだポートフォリオ評価活動は、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」の3領域に渡ってその表現力と学習の質を高める、極めて有効な学習活動であることが明らかになった。

今回は1つの単元での取り組みであったが、次年度からはポートフォリオ評価を年間の活動に位置付け、定期的に取り入れていきたいと思う。

文献

余田義彦,2001,「生きる力を育てるデジタルポートフォリオ学習と評価」,高陵社書店
吉田 浩,2001,「スタディノートによるデジタルポートフォリオ評価 五年国語『朗読』への活用 (ビデオ)」,21世紀教育研究所